

## 第10節 吾智網漁業

### 1. 沿革

#### 1) 吾智網漁業の歴史

吾智網漁業は古く（江戸時代）から瀬戸内海でタイを主対象に操業されてきた漁業である。タイの生態をよく把握し、その棲息漁場の詳細を熟知した上で操業することが必要であるため、技術的漁業（能率漁法）といわれる。

江戸時代に広島で初めて操業されたという説もあるが、九州では福岡県で最初に導入された。機帆船の沈没した場所で操業したらタイがよくとれ、土管魚礁等により漁場を造成、拡張しながら漁業を続け、その後、佐賀、熊本県へと広まっていったといわれている。

吾智網の名の起源は、「5人の智者が考案したから」との説がある。能率漁法であるため、北は青森、秋田県から九州まで全国24県で操業されている。

#### 2) 本県における吾智網漁業の歴史

##### (1) 吾智網漁業の導入の経緯

本県においては、昭和30年代（1955～1964年）の初期に出水、東町の不知火海海域に導入され、その後、漁法講習会や先進地視察により30年代後半から40年初めにかけて北薩の外海に面した甌、西薩海域へ、さらに40年代（1965～1974年）の中ごろには南薩、鹿児島湾内、東串良等、タイなど底棲性の魚が多い海域へ普及していった。

普及当初はタイ類の漁獲も多く活況を呈し、家族労働（2人）で操業が可能のため、都会からのUターンによる親子で操業する者も多かった。その結果、漁船も大型化され魚探はじめ有力機器が装備された。しかし、乱獲により現在はタイ資源が減少し、操業漁船数も最盛年47年の522隻から59年には376隻と減少した。最近ではタイから対象魚種を転換することによって、各地区の基幹漁業として操業されている。

##### (2) 漁業制度との関連

吾智網の原型は、楕円形をした一枚の網地を縮結することによって袋状にし、その両端に着いている曳網の包囲形を狭めることで、タイを威嚇しながら魚捕部に追い込み、網目に刺させて獲るものであった。このため漁業の分類上は旋網でもなく、曳網とも思われないために、吾智網として独立した分類になっている。

しかし、現在では吾智網の分類として

- ・ 操業形態で.....
  - 一艘吾智網
  - 二艘吾智網
- ・ 漁具構造で.....
  - 無囊吾智網
  - 有囊吾智網に大別される。

・ 古くは操網上からは、ローラー吾智網と普通の手で繰上げる吾智網があった。

現在、本県で行われているのは、一艘・有囊・ローラー吾智網が主体である。吾智網漁業は知事許可漁業であり、許可にあたっては次の制限条件が付されている。

ア．漁船は5ト未満とする。

イ．漁具の規制として、前夫井網、かえし網、沈子方へのチェーン、グランドロープの使用禁止。

ウ．引き網（ロープ）の長さは片方で

- ・北薩地域 600m (うち西薩に面した海域 800m)
- ・不知火海と西薩海域は 400m

エ. 漁 期

- ・不知火海は周年
- ・北薩海域；4月～12月 (うち阿久根，長島地区は6月～7月禁漁)
- ・西薩海域；4月～12月 (自主規制)
- ・鹿児島湾；4月～12月，11月～7月 (地区により違う)
- ・大隅海域；11月～7月

(3) 漁具漁法

本県で操業されている吾智網は，発祥の地である瀬戸内海のタイ・ローラー吾智網と操法が同一と考えられる。その漁具漁法を紹介し，併せて本県の漁具を記述する。

漁 具

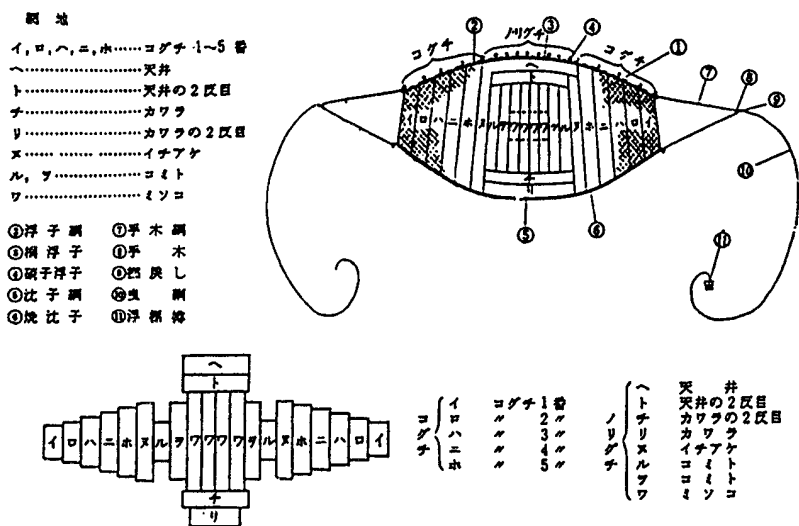


図 1-1 ローラー吾智網構造図 (山口県)

	符号	名 称	材 料	太 さ	目 台	掛目	長 さ	反数	結節	所要量
コグチ (袖部)	イ	コグチ 1 番	アミラン220デニール	12本燃	12 cm	50	10.5 m	2	鮭又	21 m
	ロ	〃 2 番	〃	〃	〃	〃	12.25	〃	〃	25.5
	ハ	〃 3 番	〃	〃	〃	〃	15.75	〃	〃	31.5
	ニ	〃 4 番	〃	〃	〃	〃	18.75	〃	〃	37.5
	ホ	〃 5 番	〃	〃	〃	〃	21.75	〃	〃	43.5
ノリグチ (囊部)	ヘト	天 井	〃	〃	〃	〃	20.25	1	〃	20.25
	ト	天井の二反目	〃	9本燃	10.6 cm	〃	〃	〃	〃	20.25
	チ	カワラの二反目	〃	〃	〃	〃	21	〃	〃	21
	リ	カ ワ ラ	〃	12本燃	12 cm	〃	15.25	〃	〃	15.75
	ヌ	イ チ ア ケ	〃	9本燃	10.6 cm	〃	24.3	2	〃	48.6
	ル	コ ミ ト	〃	〃	〃	〃	12	2	〃	24
	ワ	コ ミ ト	〃	〃	〃	〃	24	2	〃	48
	ヲ	コ ミ ト	〃	〃	〃	〃	24	2	〃	48
	ヲ	ミ ソ コ	〃	〃	9 cm	〃	31.5	4	〃	126

浮子網 シュロ3子燃径9mm 106mのもの2つ折りに使用  
 径4mm53mのワイヤーを擦り込んで使用

沈子網 マニラ径15mm 56m  
 径6mmのワイヤー56mに中古のマニラを柔らかく打ちかえしてまきつけて使用

手木網 マニラ 浮子方径 12mm 10.3m  
 沈子方径 15mm 10.6m

浮子網 長さ36cm幅4.5cm厚さ3cmの正方形のもの72.7cm間隔に45枚使用  
 硝子浮子 径12.1cm  
 ノリグチ中央とイチアケの部分にのみ径15.1cmのものを用い、他は12.1cmのものを、袖部(コグチ)は網浮子2ヶに1ヶの割合で、囊部(ノリグチ)は交互につける

沈子  
 焼沈子 188g円筒形のもの180ヶ  
 囊部(ノリグチ)には沈子網1.5m間に4ヶ  
 袖部(コグチ)(3番-5番)沈子網1.2m間に4ヶ  
 袖部(1番-2番)沈子網1.1m間に4ヶ  
 漁法

- ・底潮の方向をみた後、図1-2のように左舷側の曳網(以下ロープと呼ぶ)についた浮標樽を投入し、図のように航走し、順次Aロープを操り出し、網に近づいたら機関をストップし、惰性で左に転回し、浮子方、沈子方に一人ずつ付いて網を入れる。

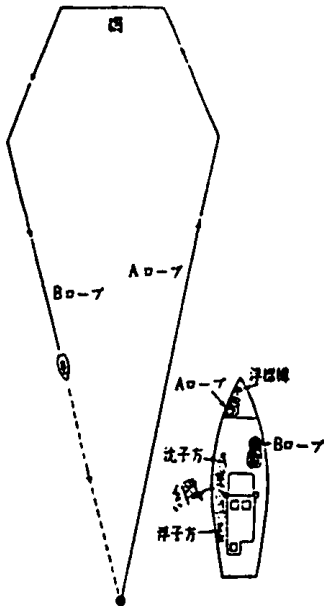


図1-2 投網図(瀬戸内海の漁業)

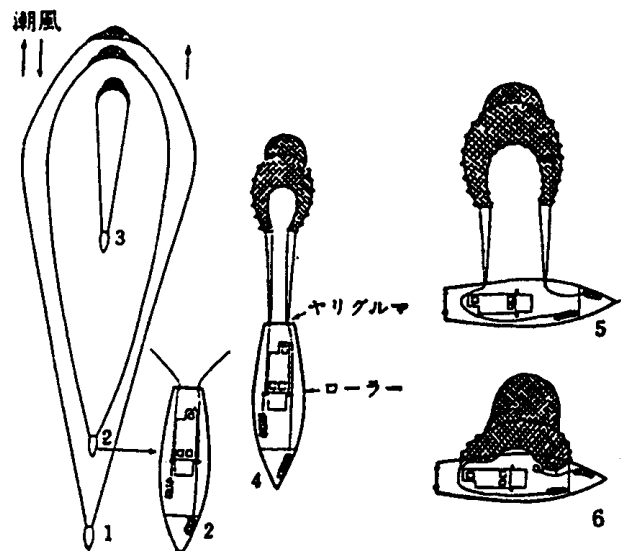


図1-3 揚網図(瀬戸内海の漁業)

- ・投網が終わったら再び全速にてBロープを投入し、浮標樽に近づき機関を停止し、これを拾い上げる(この間約6分間)
- ・Aロープを3人で少し船内に繰り込み、Bロープとのバランスをとり、船尾ローラーにかけて固定し、そのまま7~8分、船を停止して曳網の沈下を待つ。
- ・曳網が十分に沈下したらA、Bロープを左右のローラーにかけ、ハリグルマを通してまき始める(図1-3の1,2,3)。手木まであがったら(図1-3の4)、ローラーからA、Bロープをはずし、風を左舷に受けるようにして少し前進、Bロープを左舷側の船尾に移し(図1-3の5)、A、Bロープに2人ずつ付いて手木網をあげ、次に揚網する(図1-3の6)。1回の操業に約30分を要す。

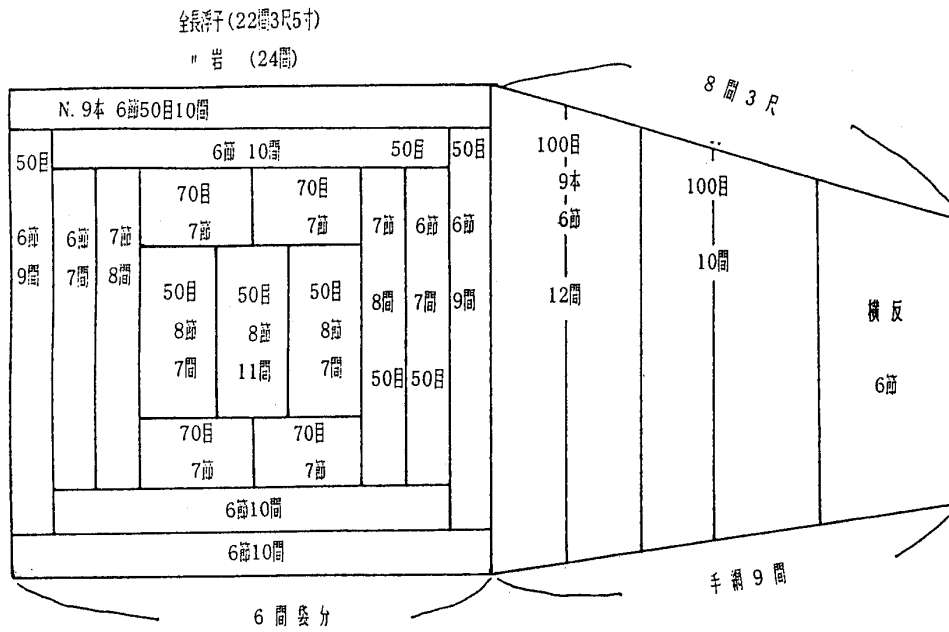


図 1 - 4 本県の吾智網構造図 ( K漁網会社提供 )

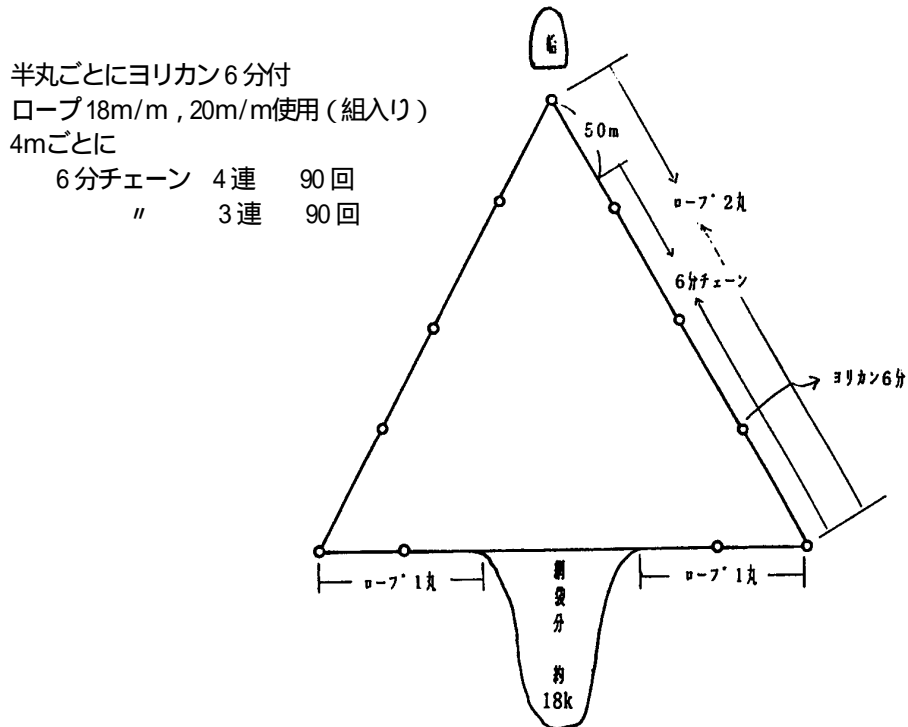


図 1 - 5 吾智網ロープ仕立て ( 本県 )

(4) 漁業技術の改良普及の経過

この漁業は能率漁法であり，他の漁業との競合関係が大きいため，操業漁船のトン数制限があるほか，ロープの長さなど漁具についても規制がある。このため漁業技術の改善については特記すべきものはない。

ただ，1982（昭57）年ごろ，北薩の長島漁協へ水俣の漁網屋が曳き吾智の漁具を紹介している。この漁法だと八モ，エソ等がよく漁獲されるため，漁獲量が増大したといわれる。現在，長島漁協，阿久根漁協，東町漁協等で操業している。

(5) 漁業構造の推移

経営体

表1-1 年次別吾智網漁業経営体

年次	昭39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
経営体	96	118	137	144	145	175	399	469	522	434	441	388

年次	S51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62
経営体	393	392	386	379	401	400	389	390	376	355	354	355

年次	S63	平元	2	3	4	5	6	7
経営体	313	310	312	310	304	291	291	265

（資料：県水産要覧）

ア．経営体数は，1964（昭39）年に知事許可漁業として96体が善業，翌年（昭40年）には118体に増加した。その後も増加を続け，1972（昭47）年には522体とピークに達したが，1973（昭48）年以降漸減傾向をたどり，300体台を続けた。1980（昭55）年には400体台にもどったものの，1982（昭57）年からは再び300体台となり，1993（平5）年からは200体台に減少している。

漁業生産量

表1-2 年次別吾智網漁業生産量

（単位：トン）

年次	昭39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
生産量	718	347	490	458	1137	624	1821	—	1014	886	933	684

年次	S51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62
生産量	714	784	764	817	797	910	1669	1539	1794	1546	1653	1843

（船曳網生産量） - （いわし類生産量） = 吾智網生産量

年次	S63	平元	2	3	4	5	6
生産量	1486	1426	1552	1493	1354	1775	2705

（資料：県水産要覧 属人統計）

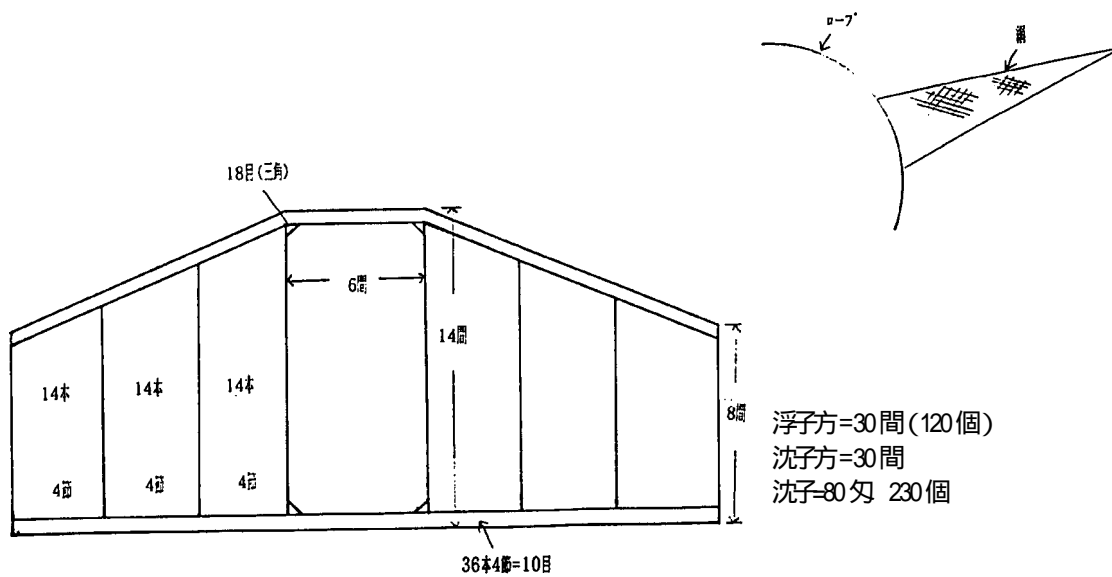
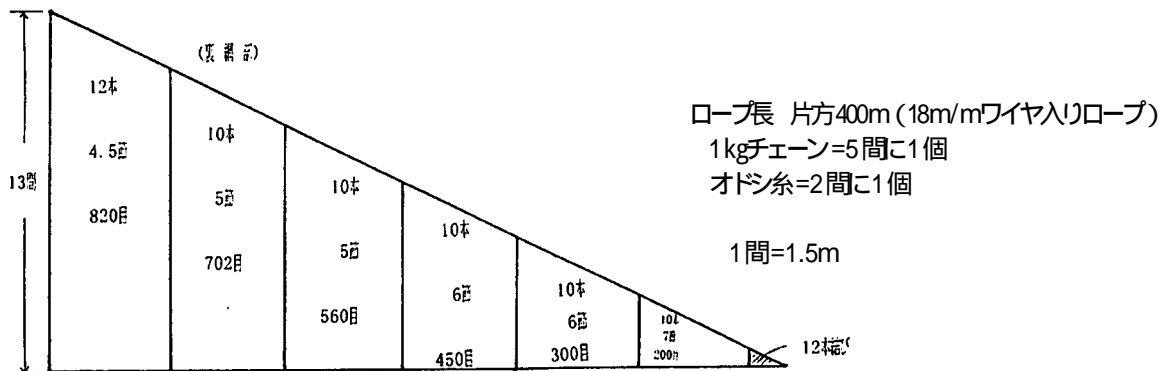
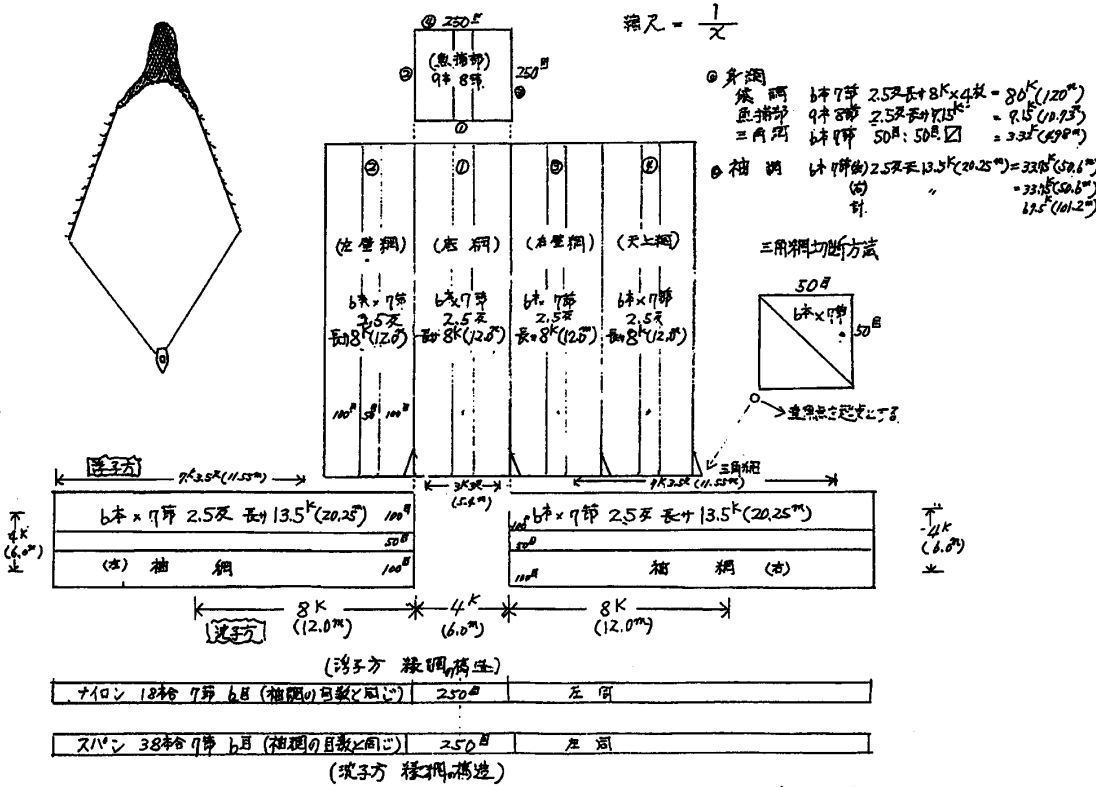
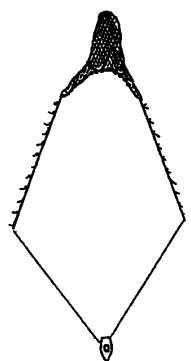
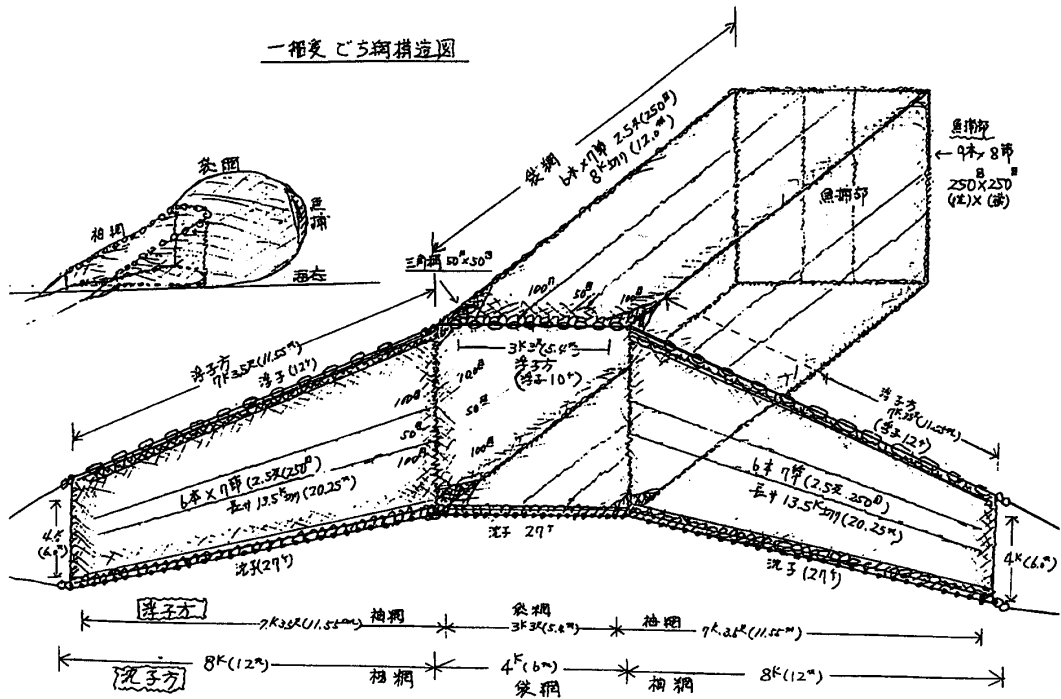


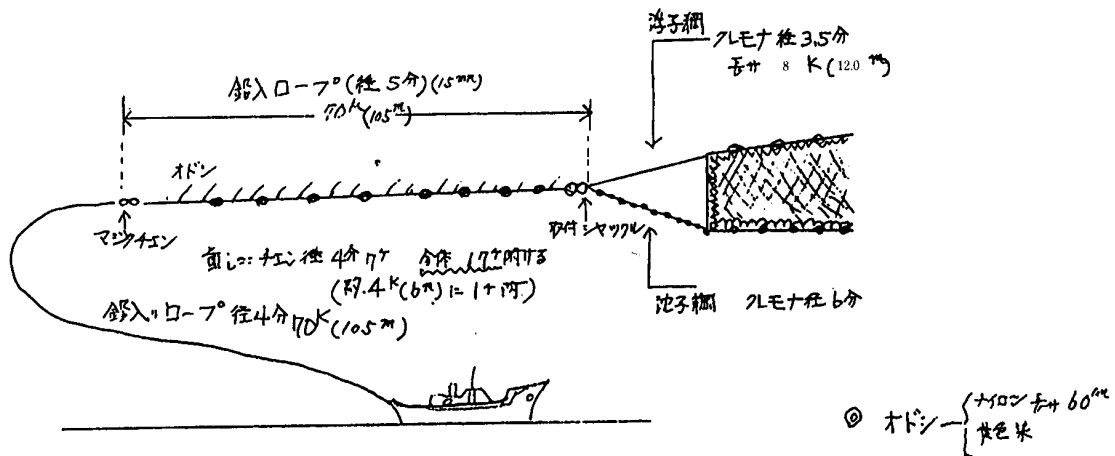
図 1 - 6 吾智網構造図 (黒之浜漁協)

一船隻ごご網構造図

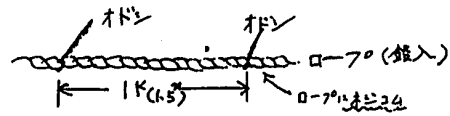
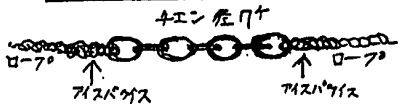


日置郡中矢野戸崎 川田盛光

図 2 - 1 一艘吾智網構造図 日置郡戸崎口川端盛光



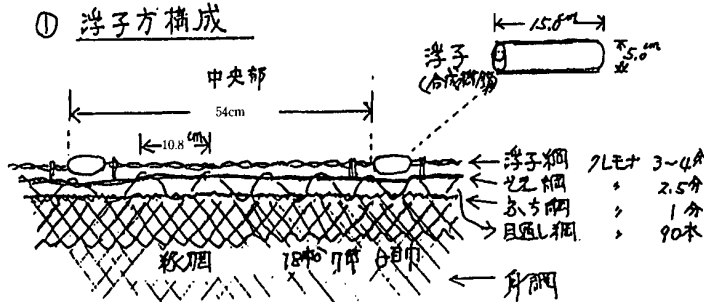
① 4エン鎖の作り方



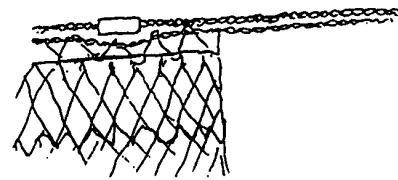
② 4エンの付け方 --- 裁取馬力の [大い方 - 重くする  
小い方 - 軽くする]

③ 曳網の長さ 水深50m 条件(オドシ径) 70K(105m)  
曳網 - 70K(105m)

① 浮子方構成



浮子方端の部



浮子総数 24ヶ

網の中央 54cm 間隔の浮子 10ヶ

網の両端 100cm 間隔の浮子 12 X 2 = 24ヶ

② 沈子方構成

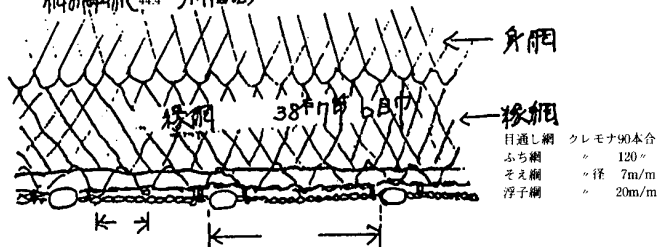
沈子総数 80ヶ

網の中央 (23cm 間隔) 沈子 1ヶ

網の両端 (44.4cm 間隔) 沈子 1ヶ

沈子 径 6.0cm (210g)

(トキ製)



沈子方端の部



図2-2 曳網の構造図

(山下 耕平)